

1980 年以降のディケンズ批評

ディケンズとポストコロニアル批評

Dickens and Postcolonial Theory

玉井 史絵

Fumie TAMAI

Ⅰ ヴィクトリア朝文学とポストコロニアル批評

ポストコロニアル批評の源流は、おそらくはポストコロニアルという言葉が生まれる以前にも遡ることができるが、独立した批評のカテゴリーとみなされるようになったのは 90 年代以降である。1978 年に出版されたエドワード・サイード(Edward W. Said)の *Orientalism* は、東洋を表象する西洋の文学や文化と植民地支配の権力との相互関係を検証し、帝国主義というイデオロギーの言説を明らかにする画期的な書物であった。そしてそれ以来、西洋の知と表象が植民地支配の歴史に果たした役割を検討しようとする研究が盛んに行なわれるようになった。バート・ムア・ギルバート(Bart Moore-Gilbert)はポストコロニアル批評を定義して次のように述べている。

[P]ostcolonial criticism can still be seen as a more or less distinct set of reading practices, if it is understood as preoccupied principally with analysis of cultural forms which mediate, challenge or reflect upon the relations of domination and subordination—economic, cultural and political—between (and often within) nations, races, or cultures, which characteristically have their roots in the history of modern European colonialism and imperialism and which, equally characteristically, continue to be apparent in the present era of neo-colonialism.¹

ジャック・デリダ(Jacques Derrida)は西洋形而上学とは、西洋の文化を反映した「白人の神話」だとしている。ポストコロニアル批評はディコンストラクションの流れの一つとして、文化における西洋中心主義の言説を明らかにしようとする試みである。

ヴィクトリア朝文学に関しても、*Orientalism* をきっかけとして、文学と植民

地支配の歴史との関わりを再検討する動きが始まった。けれども当初その対象となったのは、1870 年代以降のいわゆる「新帝国主義」と呼ばれる時代の、ハガード(Rider Haggard)、キップリング(Rudyard Kipling)、コンラッド(Joseph Conrad)といった一握りの作家達であり、ヴィクトリア朝初期、中期の小説は専ら国内に関心を向けたものと捉えられていた。その流れを変えたのは、1988 年に出版されたパトリック・ブランドリンジャー(Patrick Brantlinger)の *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830-1914* である。これはヴィクトリア朝の旅行記、冒険、開拓物語、小説などに現れた帝国主義的テーマをはじめて包括的に研究したもので、特に初期、中期の人々の植民地に対する強い関心を明らかにしたという点で、後の研究に大きな影響を与えるものとなった。

ブランドリンジャーはしかしながら、帝国と文学との関係を主にテーマ的、地理的要因と結びつけて論じており、彼の関心は冒険や移民などを描いた作品に限られていた。90 年代に入ってヴィクトリア朝文学と帝国主義との関係がさらに関心を集めるにつれて、小説というジャンルそのものの持つ帝国主義的な性格に注目し、小説が単に植民地支配の歴史を反映しているばかりではなく、帝国主義のイデオロギーの構築に積極的に貢献したと主張する批評家が現れた。サイドは *Culture and Imperialism* (1993) で、世界におけるヨーロッパのヘゲモニーが確立し始めた 18 世紀の終わりという時期が、ブルジョワジーが台頭し、彼らの文学ジャンルである小説が誕生した時期でもあったという事実に着目している。そして、「帝国がなければ、私たちが今知っているような形でのヨーロッパ小説はなかった」と論じ、次のように述べている。

I am not trying to say that the novel—or the culture in the broad sense—“caused” imperialism, but that the novel, as a cultural artefact of bourgeois society, and imperialism are unthinkable without each other. Of all the major literary forms, the novel is the most recent, its emergence the most datable, its occurrence the most Western, its normative pattern of social authority the most structured; imperialism and the novel fortified each other to such a degree that it is impossible, I would argue, to read one without in some way dealing with the other.²

スヴェンドリニ・ペレーラ(Suvendrini Perera)は、*Reaches of Empire: The English Novel from Edgeworth to Dickens* (1991)において、このサイドの立場に基づき、1800 年代初頭から 70 年までの小説を取り上げて、文学と帝国主義の相互作用を分析している。ペレーラはサイドの主張を繰り返し、「帝国は単に小説の中に表現されていたり、反映されているだけでは」なく、「帝国は小説によって先んじられ、市民権を与えられた」³と述べている。ブランドリンジャーの関心が帝

国を直接描いた旅行記や冒険、開拓物語であったのに対して、ペレーラの関心は一見帝国とは何の関係もないように見える家庭小説であり、帝国と家庭との領域のつながりであった。彼女は、女性達と恋愛の物語でロンドンの外とはほとんど関係がないと考えられてきた家庭小説のなかで、家庭が「外部の」もの、「外国の」もの、そして「他者」を通して、定義され、形成されてきたと論じている。そして植民地での支配関係がいかに家庭内の支配関係に投影され、女性の役割が定義づけられ確立していったか、また帝国の暴力に対する不安がいかにイギリスの家庭を侵食していったかを明らかにしている。

ペレーラの関心はディアドレ・デイヴィッド(Deirdre David)の *Rule Britannia: Women, Empire, and Victorian Writing* (1995)にも引き継がれる。デイヴィッドは、国家とは「想像された政治的共同体」であるというベネディクト・アンダーソン(Benedict Anderson)の立場に従い、ヴィクトリア朝文学において女性が作家として、また表象の対象として、国家、帝国のテキスト上での構築にいかに関わったかを検証している。女性は時には「現地人」を文明化するための犠牲のシンボルとして、時には正しい植民地統治の象徴として描かれてきた。または女性は自らイギリスの支配に対して賞賛や疑問の声をあげることにより、国家、帝国の構築に積極的に関わっていた。デイヴィッドはこのような女性、帝国、文学の関係を、コリンズ(Wilkie Collins)からコンラッドに至るまでの作品を取り上げて検証している。

ディケンズとポストコロニアル批評

ディケンズと帝国主義との関わりに関しては、ハンフリー・ハウス(Humphry House)やエドガー・ジョンソン(Edgar Johnson)といった初期の批評家達も既に言及している。ハウスはピップの上昇物語の背後にある「拡大する海外の市場」⁴の存在を指摘し、ジョンソンは『エドウィン・ドルードの謎』にディケンズの反植民地主義的態度を読み取っている⁵。しかしこれらの批評において、帝国は関心の中心ではなく、あくまでも小説の時代背景の一部としてのみ、注意が向けられたに過ぎなかった。プラントリントンはオーストラリア移民、開拓の文学に関する第3章で『デイヴィッド・コパフィールド』、『大いなる遺産』や『ハウスホールド・ワーズ』に掲載されたサミュエル・シドニー(Samuel Sidney)の記事などを取り上げ、オーストラリアがイギリスの罪人、貧民、失敗者達の回復の場となっていること、またその過程において、原住民はやがては滅びる運命にあるものとして描かれていることを論じている。またセポイの乱(Indian Mutiny)に関する第7章では、反乱を描いた作品のひとつとして1857年のクリスマス・ストーリー、「あるイギリス人捕虜達の危機」を取り上げ、反乱者に対するイギ

リス国民の怒りとともに、ディケンズの民族浄化をも肯定する人種差別主義的態度を論じている。⁶

帝国と家庭との領域のつながりに関心を持つペレーラやデイヴィッドの論において、ディケンズの作品はより中心的な位置を占めている。ペレーラは『ドンビー父子』に関する第3章で、女性性や家族という概念の構築を帝国の政治経済の中で検討している。小説は帝国における古い商業から自由貿易への移行を描いているが、その衝撃は、家庭という場での女性、子供の商品化という形で表されていると彼女は論じる。ドンビーの致命的な誤りはフローレンスの商業経済と家庭経済における価値を認識できなかったことであった。けれども彼がフローレンスと和解し、自らの不健全な経済原理を放棄することで、彼女の女性的影響力は商業経済の一部として組み入れられ、帝国のビジネスは再興される。フローレンスとロマンティックな冒険の世界を体現するウォルターとの結婚は、帝国の貿易とヴィクトリア朝的家庭の安定との結合であるとペレーラは解釈する。彼女はこうにして、女性や家族が健全な帝国のビジネスの必要性によって規定、定義されていることを証明しているのである。⁷

デイヴィッドは第2章で『骨董店』と『ドンビー父子』を取り上げている。まず『骨董店』の議論では、「野蛮/色黒/男性」のキルプと「文明化した/蒼白い/女性」のネルという対比に着目し、ネルが植民地で男性野蛮人の攻撃に直面して苦しむ白人女性の犠牲の象徴として機能しているのだと論じる。次に『ドンビー父子』の議論では、小説中で肉体的暴力を受ける登場人物がネイティブとフローレンスであることを指摘し、フローレンスが帝国で搾取される人々の犠牲の影を負っているのだと主張する。そして、ネルとフローレンスは植民地での暴力の犠牲のシンボルとなることで、イギリスの植民地統治に必然的に伴う痛みを体現し、帝国の構築に貢献していると述べている。ペレーラと同じく、デイヴィッドも帝国の政治経済の中で女性が定義されることを証明しているのである。⁸

植民地の暴力がイギリスの家庭に影を落としているという議論はペレーラの『エドウィン・ドルードの謎』に関する第5章でも展開されている。ペレーラはまずエドウィンの帝国主義的傲慢さは、ローザに対する彼の傲慢さと分かちがたく結びついていると論じる。そして「オリエンタルな血」を内に秘めるネヴィル、阿片、同性愛、「サグ」という「東洋的な」「悪」に身を染めるジャスパーといった登場人物を分析し、ジャスパーによるエドウィンの絞殺は、帝国の抑圧された底辺が現れた一種の文化的な復讐だと指摘する。『エドウィン・ドルードの謎』は、帝国の周縁部の「野蛮」がイギリスの文明の中心部を侵食していること示す物語なのである。⁹

ポストコロニアル批評の意義と問題点

ペレーラやデイヴィッド以降、*Dickens, Europe and the New Worlds* (1999)と*Dickens and the Children of Empire* (2000)の二つのアンソロジーに収められた論文を始めとして、ディケンズの小説をポストコロニアル批評の視点から再検討した論文が数多く発表されている。ペレーラやデイヴィッドが80年代から90年代のフェミニズム批評の流れを受けて、女性と帝国というテーマを中心に据えているのに対して、二つのアンソロジーではディケンズと帝国主義に関して、より幅の広い視野からの論文が集められている。

ポストコロニアル批評の大きな意義は、言うまでもなく、今までほとんど注目されることがなかった「周縁部」に光をあて、抑圧されてきた植民地支配の歴史というより大きな枠組みの中で、ディケンズの小説が再検討されるようになったということにある。中心と周縁は支配と従属という単純な構造で説明できるものではなく、相互に作用しあっている。周縁は常に中心の安定を脅かす存在でもある。ペレーラやデイヴィッドは、イギリス中産階級のアイデンティティーの中心であり、ディケンズもその構築に大きな役割を果たした「家庭」という場に、帝国周縁部の暴力の反映を読み取ることにより、ヴィクトリア朝文化のいわば闇の部分を照らし出した。

中心と周縁との相互関係は、ブライアン・チードル(Brian Cheadle)の“Despatched to the Periphery: the Changing Play of Centre and Periphery in Dickens’s Work”でも分析されている。チードルは、まず『オリバー・トゥイスト』に焦点をあて、周縁が中心のイデオロギー的純潔を維持するため、好ましくない人物を送り出す受け皿となっているが、中心と周縁はそのような単純な二元論だけでは説明できないと言う。中心はそれ自体にジェイコブ島という「未知の領域」(terra incognita)を内包して分裂しており、その権威はブラウンローという規律を課す人物によってかろうじて守られているに過ぎない。分裂する中心の矛盾は、ブラウンロー達が社会的関係の中心から切り離された田園イングランドで危うい平和を見出すという物語の結末にも明らかであるとチードルは論じる。彼はさらに『ドンビー父子』に議論を移し、周縁はその富によって中心を再生する、いわば「豊穡の角」として機能すると同時に、不安の源ともなりつつあったと指摘する。最後に彼は『エドウィン・ドルードの謎』の冒頭に現れる麻薬の幻覚などを引用し、周縁からの野蛮の脅威が偏在し、周縁と中心の区別が消えつつある世界を晩年のディケンズは描くようになったと述べている。¹⁰ 同ような議論はパトリシア・プラマー(Patricia Plummer)の“From Agnes Fleming to Helena Landless: Dickens, Women and (Post-) Colonialism”にも見ることができる。プラマーは『オリバー・トゥイスト』のアグネス、『デイヴィッド・コパフィールド』のマーサと

エミリー、『エドウィン・ドルードの謎』のヘレナを比較する。アグネスが死によって、マーサとエミリーが移民によって中心から周縁に追いやられたのに対し、ヘレナは周縁からやってきて、人種とジェンダーの境界を乗り越える人物としてポジティブに描かれている。そしてそこにますます肯定的な意味合いと結び付けられるようになった混血(hybridity)の概念が見られるとプラマーは結論付ける。周縁と中心の交わりにディケンズが肯定的な意味を見出していることを指摘した点で、プラマーの議論はチードルのものと異なっている¹¹

チードルは、ロンドンという中心が階級によって分断され、周縁部を内包していることを指摘したが、ポストコロニアル批評は階級の問題も帝国の政治経済というより大きな視野で見ることを可能とした。マルクスを引用するまでもなく、19世紀の帝国はブルジョワジーの帝国でもある。サイドは帝国の拡大、中産階級のヘゲモニーの確立、そして小説の発展を不可分一体のものとして捉えている。階級と帝国の関係について論じたものに、リリアン・ネイダー(Lillian Nayder)の“Class Consciousness and the Indian Mutiny in Dickens’s ‘The Perils of Certain English Prisoners’”がある。「あるイギリス人捕虜達の危機」は、プラントリンジャーにとってはディケンズのレイシスト的態度を如実に示すクリスマス・ストーリーであったが、ネイダーはそこに、労働者階級の反乱に対するディケンズの不安を読み取っている。下級兵卒の主人公ジブル・ディヴィスは、物語の初めは社会の上位の者達に対して不満を抱き、労働者階級の怒りを代弁している。しかし、植民地の反乱軍に囚われた後、階級の壁を越えて協力して脱出を図る過程で、彼の不満は消え、代わって「イギリス人」としてのアイデンティティーが生まれる。このように、植民地は労働者階級の不満のはけ口となる「安全弁」として機能しているのだというのがネイダーの議論である¹²。同じくネイダーの“Dickens and ‘Gold Rush Fever’: Colonial Contagion in *Household Words*”も、労働者の不満という問題を解決するのにディケンズがどのように帝国を利用したかを、1856年のクリスマス・ストーリー、「ゴールドン・メアリー号の遭難」を中心に論じている。ゴールドン・メアリー号の船長は寛大で人間的な人物であるが、「ゴールド・ラッシュ・フィーバー」という一攫千金の夢に冒された船員たちは、船長を見捨てて船を去る。ディケンズは船員たちの不満の原因を「ゴールド・ラッシュ・フィーバー」に求めることで、労働者階級の怒りの社会的経済的根源を隠蔽しているとネイダーは論じている¹³。ネイダーは階級間の闘争をそらすためにディケンズが巧みに帝国を利用していることを、この二つの論文で明らかにしているのである。

このようにポストコロニアル批評は、ディケンズの小説を帝国主義の言説の中で読むことにより、また小説の中に帝国主義の言説を読み取ることにより、

新しい解釈の可能性を示したが、問題点もある。ポストコロニアル批評はテキストとコンテクストとの垣根を取り払い、表象のパターンと植民地の権力が実際に行なったこととの間に継続性を見出そうとしたが、時にコンテクストに対して過重に依存し、その結果、過度の推論に基づいてテキストの解釈を進めていくという傾向が見られる。その例として、デイヴィッドの『ドンビー父子』に関する章を考えてみたい。デイヴィッドは鉄道の拡大は帝国の拡大を暗示していると言う。そしてカーカーの鉄道による死は「ドンビー商標の冷徹なお金儲けと帝国建設の象徴的死」¹⁴ であると述べている。この議論を支えるのは、1869年までにイギリス人が7千万ポンドをインドの鉄道に投資し、5万人がその株を保有していたというR・J・ムア(R. J. Moore)の研究である。しかし『ドンビー父子』が書かれたのは、まだイギリス国内が鉄道株のバブルに浮き立つ1846年から48年にかけてであり、イギリスの鉄道事業がインドで始まったのは1850年代に入ってからである。¹⁵ 鉄道網の拡大は、確かにイギリスの進歩を象徴するものであり、それに伴う帝国拡大をも暗示していると言えよう。しかし、鉄道と帝国との結びつきは、デイヴィッドが論じるような直接的なものではない。さらにデイヴィッドは、カーカーの死の場面を分析して次のように書いている。

Walking along “the lines of iron,” Carker feels the earth tremble, sees the “red eyes bleared and dim” close in upon him: the engine beats him down and whirls him away, striking him limb from limb, and “licks his stream of life up with its fiery heat.” He seems killed, however, as much by an improbable heat—a kind of grilling alive not in Calcutta but somewhere near the south coast of England—as he is by the train [. . .]. By virtue of a burning, explosive imagery that suggests the geography and population of colonized peoples whose labor has produced Dombey’s wealth, the colonized destroy the grand vizier of a soon to be deposed mercantile potentate.¹⁶

列車の熱をインドの熱さと結びつけるこの解釈には明らかに無理がある。

ポストコロニアル批評が、時にコンテクストに過重に依存せざるを得ない理由の一つは、それが植民地支配という「抑圧された」語りを明らかにしようとしているからである。そのような試みのもうひとつの例としてウェンイン・シュー(Wenyng Xu)の“The Opium Trade and *Little Dorrit*: A Case of Reading Silences”が挙げられる。『リトル・ドリット』と中国の阿片貿易との関連を論じたこの論文で、シューは「しばしば“重要でない”細かな点が重要な沈黙を隠している」¹⁷ と述べ、「『リトル・ドリット』の語りは中国とイギリスの関係にまつわる混乱を隠すことによって秩序を保っている」¹⁸ ことを証明しようとしている。まず、シ

ューはアーサーが物語の冒頭、40歳で中国からイギリスに帰還した際、中国での経験を一切語らないことに着目する。次に歴史的資料に基づき、アーサーが滞在していた頃のイギリス商人の中国での活動に触れ、アーサー自身はおそらく阿片貿易に直接関わっていないが、彼の罪の意識は阿片貿易という「国家の罪が内在化したもの」¹⁹であろうと推測する。そして『リトル・ドリット』が、アーサーの出生の秘密やエイミーとクレナム一家との関係など、秘密の隠蔽によってかろうじて秩序を保っているテキストであり、中国に関する事実もまた「組織的に隠蔽され、抑圧されている」と言う。

The silence about China in *Little Dorrit*, systematically hidden and suppressed, acts as a crucial agent which holds together all the arrangement that we call this text. That is to say, the silence about China is a necessary condition for the possibility of the text's existence.²⁰

しかしテキストには書かれていないことを論じたのでは、反論のしようもない。

もう一つの問題点として、ディケンズとヴィクトリア朝帝国主義との協調関係を重視するあまりに、ディケンズの帝国や人種に対する態度を、時に単純化して捉える傾向が挙げられる。例えばクーツ女史(Angela Burdett-Coutts)宛てのセポイの乱について書かれた1857年10月4日の次の手紙は、ディケンズの人種差別主義的な思想や態度を示すものとしてしばしば引用される。

And I wish I were Commander in Chief in India. The first thing I would do to strike that Oriental race with amazement [. . .] should be to proclaim to them, in their language, that I considered my holding that appointment by the leave of God, to mean that I should do my utmost to exterminate the Race upon whom the stain of the late cruelties rested.²¹

しかしこれは、ディケンズの人生において、妻キャサリンとの不和が顕在化した特殊な一時期に書かれたものであるということも、考慮に入れなければならない。事実この手紙の前後、ディケンズはキャサリンへの不満を打ち明ける手紙を様々な人々へ送っている。そのようなコンテキストから考えれば、この文章に表現されているインドの反乱者への怒りは、この時期のディケンズのやり場のない苛立ちを表わしたのものであるとも解釈できる。このような点を解明していくには、ディケンズという「自己」の内面にも重きをおく、複眼的視点も必要である。

結び

以上、ヴィクトリア朝文学とディケンズにおけるポストコロニアル批評を概観し、その意義と問題点を検証してきた。ジェレミー・タンプリング(Jeremy

Tambling)は、ポストコロニアル批評に関して次のように論じている。

There is [. . .] a predictability in some of the moves of this critical writing, whose effect confirms for the critic both the history he or she is looking for, and the reading of the historical present that is supposed to be the aim of a criticism centred on history. The deconstructive move itself, which finds the colonialist the haunted and demonic figure, ends up by re-centring the text it was supposed to take out of the metropolitan context.²²

ポストコロニアル批評が、ヨーロッパ帝国主義の歴史の確認に終わってしまうなら、ディコンストラクトしているはずの西洋中心主義の言説を、かえって強化することになってしまう。しかしそのような危険性をはりみながらも、この批評が大きな可能性を持っているのは、それがヨーロッパ以外の多様な視点を取り入れようとしているからである。デリー大学のザキア・パタク(Zakia Pathak)は *Orientalism* の与えた衝撃について次のように述べている。

To deconstruct the text, to examine the process of its production, to identify the myths of imperialism structuring it, to show how the oppositions on which it rests are generated by political needs at given moments in history, quickened the text to life in our world.²³

果たしてデリダが「白人の神話」と呼ぶ西洋中心主義を真に脱構築することが可能なのかという点には疑問の余地もある。しかし、大英帝国の外側からディケンズを読む私達に、ポストコロニアル批評は独自の視点を提供する可能性を与えてくれるものに違いない。

注

- ¹ Bart Moore-Gilbert, *Postcolonial Theory: Contexts, Practices, Politics* (London: Verso, 1997) 12.
- ² Edward W. Said, *Culture and Imperialism* (New York: Vintage, 1993) 70-71.
- ³ Suvendrini Perera, *Reaches of Empire: The English Novel from Edgeworth to Dickens* (New York: Columbia UP, 1991) 7.
- ⁴ Humphry House, *The Dickens World* (London: Oxford UP, 1942) 159.
- ⁵ Edgar Johnson, *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*, vol. II (New York: Simon and Schuster, 1952) 1120-26 を参照。
- ⁶ Patrick Brantlinger, *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830-1914* (Ithaca: Cornell UP, 1988) 109-33, 199-224 を参照。

- ⁷ Perera 59-77 を参照 .
- ⁸ Deirdre David, *Rule Britannia: Women, Empire, and Victorian Writing* (Ithaca: Cornell UP, 1995) 43-76 を参照 .
- ⁹ Perera 103-22 を参照 .
- ¹⁰ Brian Cheadle, "Despatched to the Periphery: The Changing Play of Centre and Periphery in Dickens's Work," *Dickens, Europe and the New Worlds*, ed. Anny Sadrin (Houndmills: Macmillan, 1999) 100-12 を参照 .
- ¹¹ Patricia Plummer, "From Agnes Fleming to Helena Landless: Dickens, Women and (Post-) Colonialism," *Dickens, Europe and the New Worlds*, 267-82 を参照 .
- ¹² Lillian Nayder, "Class Consciousness and the Indian Mutiny in Dickens's 'The Perils of Certain English Prisoners,'" *Studies in English Literature 1500-1900* 32 (1992): 689-705 を参照 .
- ¹³ Lillian Nayder, "Dickens and 'Gold Rush Fever': Colonial Contagion in *Household Words*," *Dickens and the Children of Empire*, ed. Wendy S. Jacobson (Houndmills: Palgrave, 2000) 67-77 を参照 .
- ¹⁴ David, 74.
- ¹⁵ Andrew Porter, ed., *The Oxford History of the British Empire*. vol. III (Oxford: Oxford UP, 1999) 38 を参照 .
- ¹⁶ David 75.
- ¹⁷ Wenying Xu, "The Opium Trade and *Little Dorrit*: A Case of Reading Silences," *Victorian Literature and Culture* 25 (1997): 53.
- ¹⁸ Xu 54.
- ¹⁹ Xu 58.
- ²⁰ Xu 63.
- ²¹ Graham Storey and Kathleen Tillotson, eds., *The Letters of Charles Dickens*, vol. VIII (Oxford: Clarendon, 1995) 459.
- ²² Jeremy Tambling, *Dickens, Violence and the Modern State: Dreams of the Scaffold* (Houndmills: Macmillan, 1995) 155-56.
- ²³ Cited in Leela Gandhi, *Postcolonial Theory: A Critical Introduction* (Edinburgh: Edinburgh UP, 1998) 65.